

関西福祉大学における「文章力養成講座」とその効果の検証

上野 輝夫、半田 結、溝端 剛

0. はじめに

関西福祉大学（以下 KUSW と記述する）では、平成 27 年度後期に、学生の日本語力向上を図るためのプロジェクトチームを結成し、経済、教育、歴史、法学、英語を専門とする教養科目担当教員が日本語力の向上を目指す方策を検討した。その結果、平成 28 年度前期より、社会福祉学部学生と看護学部学生の希望者を対象とした「文章力養成講座」を開設するに至った。本発表では、「文章力養成講座」の概略を報告するとともに、受講者の講座受講前後での日本語基礎力に変化があったのかを検証し、その結果を報告した。

1. 本研究の背景

昨今、入学試験が多様化されたことを背景に、様々な基礎学力の学生が大学に入学している。大学教育の基礎となる日本語力もその例外ではなく、小野、村木、林、他(2005)は、「中1」から「高3」までの6レベルに分類した日本語力のなかで、対象私立大学の19%の学生が「中3」レベル以下であると判定している。

いわゆる「ゆとり教育」が終焉した現時点においても、学生の日本語力低下に際立った変化の兆しは出ていない。上村（2016）は、勤務大学の学生の読書量について調査し、69%の学生が小説を、また67%が新聞を「全く読まない・あまり読まない」と報告している。さらに、教科書・テキストについては、75%が「全く読まない・あまり読まない」としている。ただし、読書への興味は80%の学生が持っていることも併せて報告している。つまり、読書はしてみたいと思うものの、実際の読書量は増えていない訳である。これが、読書を楽しむために必要な日本語力が不足しているためだとしたら、思考しながら新たな知識を得るために精読が必要とされる教科書・テキスト類を読もうとしない学生が多く存在することも容易に理解できる。その結果、仲正(2016)が指摘するように、かなりの絞りをピンポイントで出題した試験問題に対しても、問われていないことを答えようとする学生が多くいるという事態に陥ることになる。このような現状は、現役の大学教員であれば多くが経験していることであろう。ここに、大学生としての日本語基礎力を養成する必要性が出てくる所以がある。

福祉、看護、教育など実学を専攻する KUSW の学生は、就職に直結する各種国家試験や教職採用試験等の合格を目指した学習をする必要がある。しかし、全国の大学生の現状が上述したようなものでは、そもそも受験科目のテキストや学習書を正確に読みこなすことができるのだろうかという危惧さえ生じてくる。このような背景で生まれたのが KUSW の「文章力養成講座」であり、その効果を検証するために本研究を行ったわけである。

2. 「文章力養成講座」の目標

一口に日本語力養成と言っても、何をもち「日本語力」とするかについては議論のあるところである。KUSW プロジェクトチーム内でも大学教育を受けるのに必要とされる日本語基礎力について議論を重ねた結果、第一に、テキスト類を根気よく読み、理解しようとする学習習慣をつけることであるということ意見の一致を見た。読解力の養成と称して所謂国語の読解力試験の類のものを解説しても、自ら進んで新聞や書籍を読むことにはつながりにくいのではないかと。むしろ、自ら進んで読書するようになるには、社会で起こっている事象や諸問題に関心を持ち、その話題が面白いと感じる必要がある。ある話題に興味・関心が湧くかどうかは、人それぞれが持つ社会現象に対する知識（すなわち「教養」）が大きな意味を持つ。

このため、本研究では、学校教育での「国語」の授業との混同を避け、「国語力」とせず「日本語力」とした。ただし、新講座名を「日本語力養成講座」とすると、外国人向けの日本語講座と誤解される恐れがあるため、幅広い教養を身に付けながら臆せず文章の読解にあたり、かつ表現力も養成するという意味で「文章力養成講座」とした。そして、「文章力養成講座」の目標を以下のように設定した。

- (1)大学教育に必要な日本語基礎力を身につける。
- (2)大学生としての学習習慣を身につける。
- (3)社会で生起している諸問題（ニュース）に関心を持つようになる。
- (4)幅広い教養を身につける。
- (5)日本語検定により客観的な日本語力をはかる（まず3級、次に2級合格を目指す）。

(1)～(4)については、個々独立した目標ではなく、4つが共起しながら日本語力の養成につながるものである。ただし、その効果は客観的な尺度で測定されなければならない。日本語力・国語力の客観的尺度としては、特定非営利活動法人・日本語検定委員会による「日本語検定」、朝日新聞とベネッセによる「語彙・読解力検定」、日

本漢字能力検定協会による「日本漢字能力検定」や「文章読解・作成能力検定」、あるいは、時事問題への関心・知識を問う日本ニュース検定協会による「ニュース時事能力検定試験」などがある。どれを尺度として採用するかは、どのような力を養成しようとするのかという講座の目的によって異なってくる。戸田（2016）は、2015年度に実施された2016年度教員採用試験の一般教養・国語で出題された問題を分析し、文章読解や鑑賞といった国語に関する専門的知識を問う問題より、「漢字」（読み書き・四字熟語など）、「ことば」（ことわざ・慣用句・敬語など）といった日本語に関する知識を問う問題が多く出題されていると報告している。日本語検定委員会の「日本語検定」は、「敬語」「文法」「語彙」「言葉の意味」「表記」「漢字」「総合問題」という7つの領域から日本語力を測定するようデザインされており、学生の総合的な日本語運用能力を測定する尺度としては適当と判断し、「文章力養成講座」では、「日本語検定」を活用することにし、学生にその受検を推奨することにした。

3. 「文章力養成講座」の概要

平成28年度前期の講座は、週1回、各クラス10名以下の少人数の演習形式で行った。主教材として朝日新聞のインターネット教材「時事ワークシート」を、また副教材として東京書籍『日本語検定3級公式練習問題集』を使用した。「時事ワークシート」については、講座担当教員5名が毎週の定例会議で、コラム記事「天声人語」から大学生にふさわしいトピックを選び出し、以下の要領で活用した。

- ①黙読：「天声人語」（603字）を黙読し、わからない漢字や言葉をノートに書きだす。
- ②音読：声に出して読む。
- ③書写：丁寧にかつ正確に書き写す。
- ④わき道学習：週替わりのトピックについて担当教員が用意した関連資料に基づき、「天声人語」の奥に開かれた深淵な教養を味わう。
- ⑤要約とタイトルつけ：70字程に要約し、タイトルをつける。
- ⑥要約とタイトルの例示と吟味：担当教員の手による要約例と要約に至る道筋、タイトル例を示す。受講生のタイトルを全員で吟味し、最も適切なタイトルを選ぶ。
- ⑦ノートを提出し、添削を受ける。

さらに、『日本語検定3級公式練習問題集』については、家庭学習させ、毎週、授業の初めの5-10分程度を使い、予告した範囲の小テストを課した。

なお、担当教員の手による④の「わき道学習」用の資料は、「天声人語」を単なる書写や読解、漢字の読み書き練習などの教材としてとらえるのではなく、コラムに提示された話題について、教員、学生共に一緒に楽しみながらももう一步深く味わってみようという趣旨で生まれたものであり、この部分の授業内容を「わき道学習」と名付けた所以である。このように楽しみながら学ぶという姿勢が、学生の興味・関心を引き出し、さらなる読書へとつながり、ひいては前述の目標④に挙げた「幅広い教養を身につける」ことになるのではないかと期待しているわけである。

4. 「文章力養成講座」の効果の検証

4-1. Placement Test (Pretest)と Achievement Test (Posttest)の結果

新聞コラムの書写や内容の吟味・要約、漢字の練習などから読書をより身近なものにし、社会の諸問題に対する興味・関心持つ態度を育て、さらに「わき道学習」から一步深い読書へとつなげ、それが日本語力の向上に寄与するというサイクルが果たしてうまく進んでいるのかということは、客観的な尺度で測定する必要がある。

「文章力養成講座」の効果を検証するために講座開始時点と講座終了時点での学生の日本語力を測定し比較した。日本語検定3級の過去問に倣い同程度の試験を第1週目に Placement Test として、内容の異なる同程度の試験を第15週目に Achievement Test として実施した。講座登録者数は当初は49名であったが、学期途中から参加した学生を含め15週目に参加した学生は28名であった。本講座が単位履修とはならないものであり、時期的にも学期末であり正規の授業科目の試験が予定されていた頃であることを考慮すると、最終回のテストの受験者数が初回時より減ったことは仕方がない。

検証に際しては、Placement Test を Pretest、Achievement Test を Posttest とみなし、両テストとも受験した学生21名の得点結果について比較した。両テストにおける平均得点は Pretest が 73.42%、Post-test が 78.57%であった。標準偏差は Pretest が 12.23、Posttest が 7.80であった。更に、この得点差が統計的に意味のあるものであるか否かを検証するために、t-検査（両側検定）を実施した。その結果、自由度 20、t 値 3.23、 $p < .01$ で、統計的に有意差があると判定された。つまり、わずか4か月の講座受講でも学生の日本語力の向上を図ることができる可能性が示されたわけである。

4-2. 日本語検定に見る「文章力養成講座」の効果

「文章力養成講座」の目標の一つとして、(5)日本語検定により客観的な日本語力をはかる（まず3級、次に2級合格を目指す）ことを挙げた。「文章力養成講座」は夏季休暇中の特別講座、後期は前期同様、朝日新聞のインターネット教材「時事ワークシート」を活用したが、授業は新聞記事の読解、記述式問題の解答と添削など、表現力（すなわち文章力）の養成を目指した内容とした。本発表では、夏季講座と後期授業内容と小テストの得点状況などの報告は割愛し、平成28年11月12日に実施された平成28年度第2回（通算第20回）日本語検定の結果について報告した。

日本語検定委員会によると、第20回の総受検者数は40,759人、内、2級が4,231人、3級が13,215人であった。その認定率は、2級11.2%、準2級23.5%、3級39.8%、準3級30.0%となっている。また、受検生の中で大学・高等専門学校生が占める割合は19.7%であった。

KUSWの受検生について見てみると、KUSWを準会場として延べ22名が申込み、うち19名が受検した。その結果は、2級受検者数2名（認定0名、準認定1名、不合格1名）、3級受検者数17名（認定12名、準認定4名、不合格1名）であった。受検者数が少なく、詳細な検討はできないが、Placement Testにおいて、低得点のため3級の合格圏内にいなかった学生が合格したり、準認定の域にも達していなかった学生が準認定となったりしており、夏季講座や後期の講座を通しての学習効果が出たものと解釈している。また、合計得点は正規認定に十分届いているものの、領域別に設けられた基準に一項目の得点が達していないために準認定となった者もいた。

全国の大学・高等専門学校生の受検者の中で見たKUSWの受検生の得点はどのような位置付けになっているのか、KUSW用「団体カルテ」（日本語検定委員会；2016）を基に考察した。2級は1名のみ準認定であったため、3級に話を絞る。全国の大学・高等専門学校の最高得点率、最低得点率、平均得点率はそれぞれ、95.5%、34.1%、73.2%であった。一方、KUSWの受検者は同数値がそれぞれ、93.3%、62.0%、78.0%であった。KUSWの受検者は、最高得点率は更なる上昇の可能性があるものの、最低得点率は大学・高等専門学校の全受検者と比較しても高い数値となっており、また、平均得点率もKUSWの受検生が全国の学生受検生と比べても引けを取っていないことを示している。同様の傾向は、領域別に見た得点率でも確認された。

「文章力養成講座」を受講していない学生の受検結果がないので、日本語検定の結果が一概に講座の効果であると言い切ることはできないが、PretestとPosttestの結果の分析と外部の客観試験による認定率においても一応の成績が残せたことを併せ考え、本発表ではKUSWの「文章力養成講座」が講座受講生の日本語力向上に対して効果があったことを示唆しているという検証結果を報告することができた。

5. 今後の展開

今後の課題は、(1)より多くの学生が講座に参加できる体制を整えること、(2)講座の効果を測定する大学独自の客観テストを作成することである。(1)については、「キャリア形成」という観点から一部の学部・学年の必須科目に取り入れるなど部分的に達成できつつあるが、さらに進んで全学部学生を対象とした講座としてその拡充を目指したい。(2)の理由について付け加えておく。日本語検定を初めとする各種外部試験は、学生が自らの実力を試し、また卒業後のキャリア追及という意味でも重要な位置を占めており、学生にも受検を勧めたいが、講座内で行うPretestやPosttestなど客観性が要求される尺度に毎回費用の生じる外部試験を使うわけにはいかない。効果的で「信頼性」と「妥当性」のあるテストを大学が自ら作成し、適宜学生の日本語力を測る尺度として活用できるようにすることが必要である。このため、これら2点を今後の目標として掲げることにした。

参考文献

- 上村和美(2016)『読解力診断テスト』の結果から見た学生の動向『教育総合研究叢書』9号,145-153.
小野博,村木英治,林規生,他(2005)「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育：IT活用学力支援研究」『NIME研究報告2005-6』メディア教育開発センター2005.
戸田由美(2016)「2016年度教員採用試験 一般教養・国語を分析して：これからの時代に求められる教員の資質能力と「日本語力」」『教員採用試験で求められる「日本語力」』日本語検定委員会,4-5.
仲正昌樹(2016)「“文章力”幻想」『月刊・極北：名月堂書店ブログ』, <http://meigetu.net/?p=4327> より2016年10月30日検索.
日本語検定委員会(2016)「関西福祉大学・団体カルテ：語検3級」.